

日本記者クラブ会報

10月1日「法の日」会見

法曹3者初めてのそろい踏み

なぜこの日が「法の日」なのか存じだろうか。日弁連会長の説明はこうだった。1928年10月1日、権力の不当行使防止の立場から陪審法が施行されたことに由来し、43年に執行停止されたが、法律としては廃



写真のためにカメラマンの山平さん、大谷さん、島田さん、但木さん（左から）写真=産経新聞社

止でなく停止されたままになっている。5年の準備期間のうち3年半がすでに過ぎ、実施まで1年半を切った裁判員制度と関係が深いわけだ。この1週間は「法の日週間」なので、ことしも各地で裁判員制度について理解を求めるイベントが実施された。その一環として、法曹3者による初めての会見がクラブで行われた。出席は島田仁郎最高裁判長官と、法曹3者代表の大谷剛彦最高裁判所事務総長、平山正剛日弁連会長、但木敬一検事総長。

冒頭10分、島田長官が司法権の長として、刑事裁判に裁判員制度が導入されることになった経過や意義を説明して、国民

第453号
2007年
(平成19年)
11月10日発行

〒一〇〇一〇〇一
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

の理解と協力を求めた。その後、大谷事務総長、平山会長、但木検事総長がそれぞれの立場から発言した。

報道側の一つの関心は取り調べ過程の可視化問題だろう。裁判員裁判の迅速化とわかりやすさという点からも要請されるわけだが、日弁連は全過程を主張しているが、これまで検察は慎重だ。なぜ腰が重いのか。島田長官の話にもあったように「司法制度とその運用は、優れてその国の歴史や文化の所産」だからだ。

質問に答える形で、検事総長は踏み込んだ説明をした。①日本の刑事訴訟法の根底には、人間は良心に従って自分の罪を認め、潔くすべての事実を白日のもとにさらすのだ、ということがある②したがって、司法取引は厳に慎まなければならない。権力側の手法としても、おとり捜査、潜入捜査、通信傍受などの類も禁止されている。だから、自分、供述証の重要性は否定できない。さらに国民の性癖に触れて、こんなことも。日本の国民は訴訟的眞実では納得しない。裁判では「眞実」

が出なければいけないと思っている。だから、犯罪動機を重視した報道が疑いもなく行われている。これも国民が「眞実」を知りたいと思っているからなんです、と。

それで、検察としては取り調べ過程の録画・録音は自分、限定的に考えざるを得ないというわけだ。

日弁連の認識は基本的に異なる。裁判員の役目について会長はこういつている。①検察官が起訴状を出して、証明する。裁判員は常識でそれが証明できているか否かを判断すればいい。②神様になって眞実を発見してくださいということではない。

検察側の話も興味深いのだが、現実の世の中も、人々の意識も相当変わっている。長いこと専門家による「聖域」だったからこそ、①日本流の刑事訴訟であり、②「眞実」追及期待にもなっているのではないかと権力側の手法にも拡大が伴わないと非対称だというのは分かるが、まずは不利な条件で検察はスタートすべきなのではないだろうか。

最高裁判所事務総長も、評議に備え公判廷を録画することを決めたとしたうえで、検察庁の録音・録画の試行結果が「どこまでいくかを重大な関心を持ってみている」と明言した。

(専務理事 岩崎玄道)

給油継続か民生支援か



国会論戦前に政策対決

「アフガンでは多くの国が犠牲を払いながら行動している。それは戦いを続ける価値があるからだ。洋上活動は無意味だと言うのか。英仏独も辞めるべきなのか」

給油活動の継続に反対する浅尾氏に、石破氏はそうたまたみ掛けた。

論戦を挑まれた形の浅尾氏だが、「活動は役に立っているが、日本の協力には議論が必要だ」と答えるにとどまった。結局、最後まで民主党

● 石破 茂 防衛相



のように支援するのか、日本として何をなすべきか。与野党が対立しているにもかかわらず、すれ違いばかり

が考える「テロとの戦い」を支援する具体的な中身については、聞かれずじまいだった。

今回の討論会は、インド洋における海上自衛隊の給油活動の継続をめぐる、政府と民主党の防衛政策責任者が直接対決する初めての機会だった。継続に「賛成」と「反対」という立場の違いから、議論がかみ合わないのは想定範囲内とはいえ、先の場面は、両者の「すれ違い」を象徴するようなシーンだった。

● 浅尾慶一郎 民主党「次の内閣」防衛相



りで、そうした本質の議論が深まらないのは、活動の現場などから徐々に問題が浮上してくるからだ。

海自から補給を受けた米艦の燃料転用疑惑にはじまり、補給量の誤りに気付きながら報告を怠った疑い、補給艦の船泊日誌を破棄していた事実などだ。さらに、前防衛事務次官と防衛専門商社との不適切な関係が露見するに至っては、「テロとの戦い」とは次元が違うと言っても、今は誰も聞く耳を持たないだろう。

11月2日、「テロとの戦い」の現場から日の丸が消えた。本質の議論がはじまる日は来るのだろうか。そうした日本の姿を、国際社会は冷徹な視線で見つめている。

読売新聞編集委員 勝股 秀通

クラブホームページの「会見速記録」に収録する予定です。

● 初の試み

企画委員会の議論から

現職閣僚と民主党のシャドー閣僚による討論形式の会見は、民主党の政権奪取に現実味が出てきた現状で、小政党にも配慮する報道の公平という要請にガチガチに縛られない試みはできないかという企画委員会の議論から生まれた。

とはいえ、テレビはとつとつにやっている。それで鍛えられてか、石破、浅尾両氏の対応は滑らかだった。相手の攻撃によどみなく答え、破たんを見せない滑らかさは両氏の強みだろう。だが、専門知識を持ち合わせない普通の人間に最後まで強い印象を与えないという点で、滑らかさは弱点でもあると感じた。

毎日新聞政治部専門編集委員 山田孝男

10・20（土）午後6時30分～8時25分 第一部・基本的な主張（各5分）とディベート（55分） 計65分 第二部・代表質問（30分）と会場からの質問（20分） 計50分 司会・川戸恵子、代表質問・山田孝男、宮田謙一の各企画委員出席 122人

「10・1 法の日」記者会見



島田仁郎最高裁長官は冒頭に国民へのメッセージを発表した。クラブHPに会見記録を掲載

10・1（月） 司会 石村英二郎副理事長
出席 113人 写真 産経新聞社

▼裁判員制度の意義をアピール

国民が裁判員として刑事裁判に参加する裁判員制度が実施されるまであと1年半ほど。10月1日の「法の日」に行われた最高裁長官と裁判所、検察庁、弁護士会という法曹3者のトップによる共同会見は、「カウントダウン」が始まったことを意味するのだろうか。

「法の日」が制定されて半世紀近くになるが、こんな「企画」は今までなかった。裁判員制度に対する国民の理解と協力を得たいという切実な思いが伝わってくる。

島田仁郎長官たちはそれぞれの立場から制度の意義を強調した。「刑事裁判に国民の感覚と良識がより反映される」「義務が増えるのではなく権利が拡張する」。言わんとする

ことはよく理解できる。

しかし国民の側には「自分できるか」という躊躇や戸惑いがある。いかに「分かりやすい裁判」にできるかが重要になってくる。

その際に議論になるのが、取り調べという「密室」の中でのやりとりを録画・録音（可視化）するかどうか、という問題である。参加した模擬裁判が、捜査段階の自白を被告が公判で否認する想定だったので、どちらを信用していいのか、かなり悩んだ覚えがある。

日弁連の平山正剛会長は取り調べの全過程での実現を求め、但木敬一検事総長は自白によって真相を解明することが難しくなると、異議を唱えた。もはや水掛け論の様相を呈している。最高裁の大谷剛彦事務総長に見解を尋ねてみたが、「重大な関心をもってみている」と、中立的な立場を崩さなかった。

自白の信用性、任意性が争われて裁判が長期化しては、裁判員制度は大きく揺らぎかねない。模擬裁判を積み重ねる過程で、国民の意見を真摯に聞いていく必要性を感じる。

東京新聞論説委員 菅沼 堅吾

ニシム・ベンシトリット
駐日イスラエル大使

▼対パレスチナでは歯切れの悪さも

「明確」と「不明確」の両方の印象が残る会見だった。

「アフマディネジャド大統領は核兵器もホロコーストもすべて否定している」「テヘランの急進的な政権以上の脅威はない」。対イラン関係については、現政権への嫌悪感をストレートに表現した。

その裏返しだと言えるが、良好だったかつての両国関係を引き合いに、「穏健化した政権にかわれば話し合いをしたい」と語った。「イラン国民への反感はない。私の知る限り、イランに対する軍事行動の選択肢はない」とも言明した。



逆歯切れが悪かったのが、対パレスチナ関係だ。

この会見の数時間後にエルサレムで、イスラエルのオルメル首相とパレスチナ自治政府のアッバス議長との会談が予定されていた。エルサレムの帰属や国境確定など重要課題について自身のビジョンを問われ、「すべてが議論されねばならない」とは述べたものの、「会談での大きな成果を期待している」と具体的な言及はなかった。

ただ、首脳会談でも、その後の交渉でも「大きな成果」は見られない。理由は、11月開催予定の米国主導の中東和平国際会議に対する双方の認識の違いにある。

この会議で発表する共同声明で、パレスチナ側は重要課題の列挙とその達成目標時期の明記を主張。一方でイスラエル側は、「今後の指針」程度にしたい意向だ。支持率低迷にあえぐオルメル首相は和平進展で指導力回復を狙うが、過度の譲歩を懸念する与党や閣内の動きがブレーキをかけているため、とされる。

だとすれば、対イラン関係との性質の違いもあり、大使発言の「不明確」さは理解できる気がする。それでも国際会議では「明確」な成果が出てほしいと願ってはいるが。

毎日新聞外信部 草野 和彦

カレン・アブザイド 国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)事務局長

10・5(金) 記者会見 司会 矢島誠司
委員 通訳 澄田美都子 出席 39人

▼「尊厳ある生活」の重要性を強調

日本のある「親善大使」がパレスチナ自治区を訪れた後、現地で「難民キャンプなのにテントがなかった」と言うのを聞いて、あ然としたことがある。発生から約60年、440万人を超すパレスチナ難民は、「最も長く、最も対象者の多い難民問題」(アブザイド氏)である。



「故郷」に戻れるあてのない難民がブロック積みの自宅を建てる。それがイスラエル軍の爆撃やブルドーザーで破壊される。そして「テロ掃討」の名目で女性や子どもたちが巻き添えになる。「絶望」と「憎しみ」の再生産ばかりが広がる現地で、国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)は、子どもたちの教育や医療活動など基本的な人道支援を半世紀以上も実施してきた。

かつてパレスチナに対するトップドナーの一角だった日本だが、中東問題への政治的関与の必要性をうた

う一方で、人道支援の下積みに徹するUNRWAへの拠出額は07年で8位。パレスチナ内部の対立などを受けて、困窮の度合いが深まるなか、支援の輪は十分とはいえない。

リッブサービスを返めてか、小泉元首相が掲げた「平和と繁栄の回廊」構想への支持にも言及したが、パレスチナの現状をみれば、域内の経済発展を目指す構想の実現など夢のまた夢だろう。日本に求められるのは、スタンドプレーとしての「中東関与」ではない。民衆が求めているのは小手先の豊かさではなく、「尊厳のある生活」だ。彼女はそれを「平和を実現する上で最も重要なことだ」と強調した。

「政治」とは距離をとるUNRWAだが、選挙に勝利したハマスを欧米が孤立化させようとした結果、ハマ内部で「穏健派より軍事部門が力を強めた」との指摘も。そのツケを負うのはUNRWAだ。

朝日新聞外交国際兼政治グループ次長 石合力

すぎもと たかし 杉本 侃 元日本経団連日本ロシア経済委員会事務局長

10・10(水) 研究会「ロシア④ 日ロエネルギー協力」 司会 石郷岡建委員 出席 86人

▼長期的な対ロ・エネルギー戦略を

杉本さんは日露経済協力、とりわけシベリア・極東での日露エネルギー開発の生き字引である。サハリン1、東シベリアのヤクーチア天然ガス開発、多くの巨大プロジェクトが実はソビエト時代の70年代に動き出そうとしていた。杉本氏はその時代を日ソの蜜月時代だと表現する。ヤクーチアの天然ガス田開発、東シベリアからパイプラインで天然ガスを太平洋岸まで運び、液化天然ガスで日本とアメリカにそれぞれ年間75万トンの液化天然ガスを輸出するという壮大な計画である。石油と天然ガスの違いはあるものの今の太平洋パイプライン計画の先駆けと言えらるだろう。またサハリン1もその当時、まず77年に原油の埋蔵、続いてさらに有望な天然ガスの存在が確認された。が、どちらのプロジェクトもソビエト時代、動き出すことはなかった。



ヨロロッパでは同じ頃ソビエトの西シ

ベリアからパイプラインで天然ガスを当時の西独などヨーロッパに供給する世紀の締結が契約され実現した。杉本氏は悔しさとともに東のプロジェクトが実現しなかった要因としてソビエトのアフガニスタン侵攻など国際情勢の激変もあるが、ソビエト、その後のロシアに対する日本国内の無関心、戦略のなさを指摘する。質疑応答では異論も出たが、杉本氏の報告で最も注目を集めたのはロシアのエリート層の中国への見方である。杉本氏は中ロのエネルギー協力の多くは言葉だけに終わっており、具体化していないことを指摘して、その背景にはロシアの根強い中国警戒感、中国嫌いの感情を指摘する。今、ロシアは極東、シベリア開発を国家プロジェクトとし、巨額な予算を投じようとしている。杉本氏は今回は、ロシアは本気であると指摘する。過去の経験を学び、ロシアの極東開発にどのように対峙するのか、政権交代の度に猫の目のように変わるこれまでの対ロ政策ではなく、腰を据えた長期的、かつ機動的な日本の対ロ戦略の必要性を強く感じた。

NHK解説委員 石川一洋

ムスタファ・バルグーティ
前パレスチナ情報庁長官

▼パレスチナ「第3の勢力」



決める選挙を取材するためだ。当初から、現在も議長座にあるアッバス氏優勢が伝えられており、焦点はどれだけ多くの支持を集められるかだった。

その選挙で、意外ともいえる20%近い票を獲得し次点につけたのがバルグーティ氏だ。

「第3の勢力」。バルグーティ氏はパレスチナでの自らの位置づけをこう表現する。そして、「パレスチナの民主化」を最大のテーマとして掲げる。会見でも何度も「民主的に」との言葉を口にした。

イスラエルの占領を非難する内容が大半を占めた記者会見の中で、私

10・17(水) 記者会見 司会 中井康朗委員
通訳 西村好美 出席 38人

はあえて、パレスチナ内部で深刻化しているハマスとファタハの分裂について聞いた。「解決の処方せんは」そして「バルグーティ氏は第3の勢力として何ができるのか」。

解決の処方せんへの回答のキーワードは、やはり「民主的」だった。「意見の食い違いを民主的に解決すべき」。そして3つの点を挙げた。

「まずこれまで双方が犯した法に基づかない行為を見直すこと」「二つめは民主的で比例方式の選挙をできるだけ早く実施すること」「三つめはハマス、ファタハどちらにも属さない、独立した治安組織をつくること」。バルグーティ氏の政治信条が端的にしかも明確にあらわれている。そして、そのために何ができるのかについては若干語気を強めてこう言った。「我々はこれまでも彼らの間に立って来た」。

その上で、こう付け加えた。「今現在も仲介しているよ。だけどその内容を皆さんには話せないな」。穏やかなほほえみのウラに、秘めた自信を感じた。

日本テレビ放送網外報部

岩崎 建

おがた さだこ
緒方 貞子 国際協力機構
(JICA) 理事長

▼2008年は「試される年」に

国際協力機構(JICA)理事長に10月再任されたのを受けての会見だ。日本の援助政策と外交のあり方について、久しぶりに元気なサダコ節が聞かれた。

「長い間、あの国は忘れられた国だった。どうか忘れないでください。メディアの方に

にもっと現地に取材に行っていたほしい」。アフガニスタンへの支援を問われて、緒方氏はこう答えた。

90年代は国連難民高等弁務官とし

て難民支援に奔走し、01年のアフガン戦争後は復興支援の先頭に立った。ところが治安が悪化し、現地のJICAの活動も慎重にならざるをえない。「2年間支援してきたのに、最近職員も動きにくくなってきた」と言葉に悔しさがにじむ。

ミャンマー軍事政権への制裁強化論について、「国と国民は別。人道的援助は続けるが、弾圧を助長させ



10・18(木) 記者会見 司会 井田由美委員 出席 98人

る援助はできない」と明快だ。そういえば緒方氏は、90年に国連人権委員会への依頼でこの国の人権状況を調査したことがある。

緒方氏がその重要性を力説したが、来年5月に予定されているアフガニスタン開発会議(TICAD)だ。成長への加速、人間の安全保障、環境・気候変動がテーマになったが、具体策はこれからだ。

7月には洞爺湖サミット、10月には、JICAと国際協力銀行との統合による新JICAの発足が待っている。

失礼ながら、9月に80歳の誕生日を迎えた人とは思えない気迫である。「2008年は日本が試される年になる。リーダーシップを発揮しなければ」「来年は踏ん張る年になる」といった言葉が次々出てくるのは、目の前の政局対応に迫られている政治の現状への不満と同時に、内向きになっていく日本への警鐘のように聞こえた。

朝日新聞論説委員 脇阪 紀行

ウエンディ・カトラー 米国通商
代表部 (USTR) 代表補

10・19 (金) 昼食会 司会 竹田保孝理事
小此木潔委員 通訳 宇尾真理子 森岡幹子
出席 72人

▼日米FTA―機は熟していない

USTRと聞くと、鼻っ柱が強く多弁なタフ・ネゴシエーターを思い浮かべるが、カトラー氏はちよつと雰囲気が違う。政治任命ではないキヤリア官僚らしく、職務に忠実な能吏といった印象。隙こそ見せないが、質問に誠実に答えてくれた。

会見の焦点は日米間のFTA (自由貿易協定) が可能かどうかだった。お隣の韓国とのFTAをまとめた米側の首席交渉官がカトラー氏である。韓国と合意できたのなら、日本とはどうか? 参加者の関心は、この一点に集中していた。

果たして米政府の答は「ノー」であった。カトラー氏は「機は熟していない」と述べ、いくつか理由を挙げた。日本政府内に意見対立がある点。それを解消して意思統一する政



治的な熱意が感じ取れないという認識。えん曲的表現ながら「交渉を始めるられないのは日本側の準備不足が原因」だと言っているに等しい。

カトラー氏は、この米政府の公式見解を伝えるために、あえて不得意な記者会見に臨んだのだろう。この人はUSTRの幹部の中でも、嘘をつくことやハッタリが下手な方だ。通商交渉の舞台でも、生真面目で実直な人柄が相手側に信頼され、様々な難局を乗り越えて実績を築いてきた。本人は「日本側の問題」と示唆したつもりでも、それが建前論であるのが見え見えなのが面白い。

米政府の本音は、正直なカトラー氏の言葉の端々に、にじみ出ている。ひとたび日本とFTA交渉に入れば「後戻りや失敗は決して許されない」。過去に両国間で摩擦が燃え盛った「日米構造協議や包括経済協

議以上に巨大な交渉となる」……。難航必至の日米FTAに突き進むには、米国内で大きな政治的リスクが伴う。その賭けに出る体力は、米ブッシュ政権には残っていない。

日本経済新聞編集委員兼論説委員

太田 泰彦

稲場 雅紀 アフリカ日本協議会
国際保健部門ディレクター

10・19 (金) 研究会「HIV/エイズ」
司会 宮田一雄委員 出席 25人

▼洞爺湖でも感染症対策は重要課題



来年7月の北海道・洞爺湖サミットでは、感染症対策が重要課題になります。

化を支える最も活動的な人々たちを毎日1万人近くも失っている。エイズによる死者の大半は途上国の人たちだが、国境を越えて人も物もウイルスも移動する21世紀の世界では、先進国もまた、めぐりめぐって大打撃を受ける。治療薬が普及すれば助かる多数の人が途上国で死んでいく現実を座視することは、先進国の指導者にも許されない。

こう言うと、「まさか」と怪訝な顔をする人が多い。そこでアフリカ日本協議会でNGOの立場から国際感染症対策に取り組んでいる稲場雅紀さんにご登場願った。世界の3大感染症と闘うための世界エイズ・結核・マラリア対策基金や国連の会合にも出席し、いま日本国内で世界の感染症対策の動向に最も詳しいのが稲場さんだからだ。

3大感染症による年間の死者は計600万人。エイズだけで290万人が亡くなり、原因ウイルスであるHIV (ヒト免疫不全ウイルス) には毎年430万人が新たに感染している。その多くは働き盛りの年齢層だ。世界は、各国の政治、経済、文

稲場さんによると、こうした考え方がG8首脳の共通認識になったきっかけは、2000年の九州沖縄サミットで日本が沖縄感染症対策イニシアティブを発表し、各国に感染症対策分野への新たな追加的資金の必要性を呼びかけたことだという。エイズ対策ではそれが予防、治療、支援の普遍的アクセス (必要な人が誰でも利用できる状態) の実現という目標にまで発展している。

沖縄から一巡して再びホスト国になる来年のサミットで、日本は具体的にその目標を実現するためのどんな提案を用意しているのか。この点がいま、地球温暖化対策と並ぶ国際社会の大きな関心事項だという。

産経新聞編集委員 宮田 一雄



なかもら
中村 哲^{てつ}
現地代表 ペシヤワール会

▼小田原評定より用水路

「日本が戦争プロセスに一切関与しないと表明するだけでかなりのインパクトがある」

インド洋での給油活動をめぐると野党の攻防が白熱化する中、中村さんはそうした国会論戦を「小田原評定だ」とぼつさり切り捨て、日本はアフガニスタンの復興のみに参加すべきだと訴えた。以前米軍ヘリから機銃掃射を受けた。その燃料がインド洋から来ているとすれば愉快な話ではないと怒る。

20年以上にわたりアフガニスタンを中心に医療支援や井戸作りを進め、03年にアジアのノーベル賞とされるマグサイサイ賞を受賞した。

中村さんが強調したのはアフガニスタンが今未曾有の危機に直面していることだ。それ

10・23(火) 研究会「アフガニスタン農村の現状」司会 中井良則委員 出席 89人

はタリバンの復活ではなく、2000年以来大規模な干ばつに見舞われていることだ。地球温暖化の影響でヒンズークシ山脈の雪がとけ、農村の砂漠化が急速に進んでいる。アフガニスタンは人口の8割が農民の農業国家。あと10年ほどで生きていく空間の半分が消滅する。ユーラシアで最も大きな被害を受けているのがアフガニスタンで、500万人が飢餓線上にあるという。

緊急で可能な対策として訴えたのが農村の復興と食糧自給率の向上だ。中村さんが実践しているのは農業用水路の整備や清潔な飲料水の確保だ。水さえあれば農民は村に戻り、砂漠に緑がよみがえる。復興支援も「貧しい人々にお金が落ちる制度、地元の人々が維持補修できる事業を実施すべきだ」と主張する。

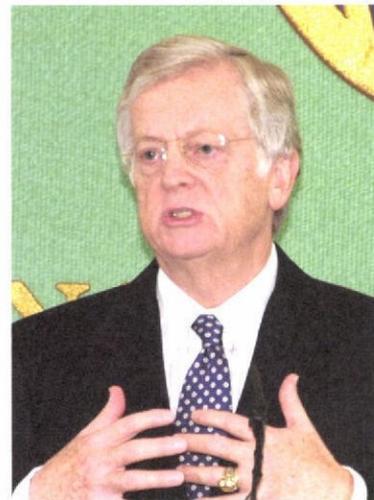
今現地で何が起きているのか、それを知らずに議論はならない。必要なのは被害者の農民の視点に立った支援だと中村さんは指摘する。「小田原評定をするより、早く帰って、用水路を1キロでも延ばした方が有益だ」

NHK解説主幹

山内 聡彦

J・トーマス・シーファー
駐日米国大使

10・24(水) 昼食会 司会 船橋洋一委員長 橋本五郎委員 通訳 グレック文字子 大野理恵 出席 151人



▼米国はアジア安定の『より糸』

対テロ特措法が11月1日で期限切れになりインド洋での海上自衛隊の補給活動が中断することについてシーファー大使は「もし日本がこのまま補給ができなくなれば国際社会に非常に悪いメッセージを与える」と語り補給活動の早期再開を促した。

対テロ戦争で日本が「抜ける」とへの懸念と同時に、中国の台頭などでアジア情勢が大きく動き出している中で何とか日米同盟を維持、強化して行かなければならないとのメッセージが会見から伝わってきた。インド、中国、日本という経済の強力なエンジンを抱えるアジアには発展への大きなチャンスがある。一

方で、パレスチナ、イスラエルからイラク、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、中国、朝鮮半島とつらなる西アジアから東アジアにかけての地域はテロ活動や核開発競争が進む「危機の回廊」でもある。貧困や強権国家の存在が民主化を阻んでいる地域もある。

アジアは「好機」に富み「危機」の芽をはらむ地域だ。アジア情勢を分析する中で大使は危機の顕在化へ警鐘を鳴らした。「アジアは大同土が衝突する世界最後の地域になることが考えられる」。朝鮮半島や台湾海峡では「核による惨禍につながるかねない『8月の砲声』(第1次世界大戦の開戦前夜の状況を描いた歴史家バーバラ・タックマンの著書)シナリオさえあり得る」と述べた。「米国はアジアの安定を構築する『より糸』である」と言う。危機を回避しアジアに安定をもたらす役割を果たすのは米国だ、という大使の持論には強烈な自負が見えた。

読売新聞国際部長

寺田 正臣

モハメッド・サルマーウィ
エジプト作家連合会長

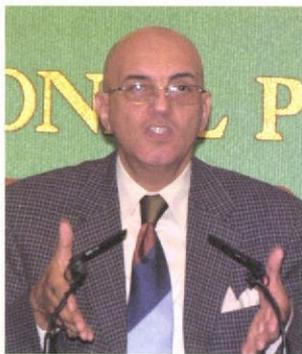
10・26(金) 囲む会 司会 脇祐三委員
通訳 西村好美 出席 31人

▼強権から民主への転換点

2003年、イラク戦争でフセイン政権を倒した米ブッシュ政権は中東の民主化推進を声高に提唱した。それを受けアラブ世界の内部からも民主化の動きが出たが、最近ではそのペースは落ちてきているようにも思える。

アラブの主要国家エジプトのほかパレスチナなど各国・地域の選挙でイスラム原理主義系勢力が伸長したことが、政権担当者の警戒感を呼び起こした面もありそうだ。

サルマーウィ氏はエジプトが1950年代に英国の影響を排除し共和制を確立して以降約半世紀の歴史で今、強権政治から民主政治への「転換点に立っている」と強調した。エジプトをめぐるのはムバラク大統領



が25年も指導者ポストにとどまっていることへの批判もある。

同氏は「今や20以上も政党がある」と複数政党制が育ってきた点を指摘する一方で、「人権団体や民主化を求める組織が増えており、市民社会が地歩を得つつある」と力説し理解を求めた。

エジプト作家連合の会長も務める傍ら戯曲、小説を手掛ける文筆家だ。ただ過去に文化次官を務め、国立大学で教えた経験もあり、エジプト社会の変化の中でイスラム系政治勢力が台頭し国家の安定が揺らぐことへの懸念が言葉の端々に伺えた。

アラブのメディアではロンドンに拠点を置く新聞やアルジャズイラなど衛星放送のように国境を越えたメディアが出てきた。サルマーウィ氏は「自由の扉を開けた」と指摘。国家がメディアを操りにくい時代に入ったと指摘する一方、「どのトピックが本物か吟味する余地がある」と述べ、新たなメディアがセンサーシヨナリズムに走らないよう戒める発言も聞かれた。

日本経済新聞国際部

中西 俊裕

志位 和夫
共産党委員長

10・31(水) 昼食会 司会 岸田郁弘
理事 高橋利行委員 出席 72人

▼選挙区新方針、単純な見方否定

志位委員長に
対し会場がいちばん聞きたいと思っていたのは、共産党の衆院選挙戦略転換の真意と展望だった。次期衆院



で、どっかの党を利用する判断で行ったことではない」と繰り返し強調した。これまで共産党候補に入れていた票の行方については「支持者が自民党、公明党に入れるとはなかなか考えられない」と本音を漏らしながらも、「民主党の候補に入るかどうか分からない。政党がどういう態度を取るか、候補者によっても違う」と言って、単純な見方を否定した。しかし共産党の新方針が衆院選に大きな影響をもたらすことはなかなか否定しがたく、そうした効果も志位氏ら幹部はよく分かっているはずだ。また当選のおぼつかない候補を立てることが結果的に自民党を利用してしまふことのジレンマに直面していることは理解できる。

選の小選挙区立候補を先の参院選比例代表の得票率が8%以上の選挙区に絞るとの新方針。これが歓迎、恐怖と分かれるが、民主党、自民党どちらにも大きな波紋を広げている。民主党選対は、候補を立てない選挙区でも共産党票は1、2万票あるが、その票は間違っても自民党には流れないと、早くも皮算用が進んでいる。自民党などでは、総選挙の結果次第で、民主党政権に共産党が加わってくるのではないかとこの疑念も生じている。あるいはことさらそのことを宣伝しようとしている風もある。

志位氏は8%以下の選挙区での候補立見送り方針を党の力をリアルに判断した結果だとし、「政局狙い

とりあえず3百万円の供託金を没収される負担からは解放される。だが結果が良くなければ、共産党は支持基盤を失い、消滅の危機に立つことにもなりかねない。

共同通信記事審査委員

神原 元廣



酒井 明司 三菱商事業務部
ロシア担当次長

▼ロシア・ビジネス論も展開

ロシア最大の企業で、世界最大の天然ガス会社でもある「ガスプロム」については、その実態が意外と知られていない。ロシア社会に大きな影響力を持ち、国家の命運を握るともいわれながら、その情報はなかなか入ってこないのが実情だ。

日本では数少ない専門家でもある酒井さんは、「ガスプロム」の強さ、弱さ、問題点を簡潔に話してくれた。例えば、急激な発展・拡大に人材が追いついていない。将来への予見不確実性の恐れから長期契約に固執する。今後の開発について、企業内部のコンセンサスが「ない」など。

また、長年の経験からのロシア人論およびロシア・ビジネス論が面白かった。「ロシアは独裁国家といわれるが、上が命令しても、下は聞くことを聞かない。人間的に信服

10・31(水)研究会「ロシア⑤」ガスプロムの実態」司会 石郷岡建委員 出席 100人

していない限り、命令には拒絶する」という指摘は、ロシア人のアナキーな性格をよく表している。さらに、「ロシアでは得体の知れないことがおきるが、陰謀は2%で、カオス(混沌)が98%だ」という指摘もなるほどと思う。「契約とはある時点での当事者間の合意に過ぎない。明日は何が変わるか分からない。変わるのならば、また合意をすればいい」という大らかな(?)「契約概念」はユーラシア大陸を駆け巡った草原遊牧民族の血を実感させる。そして、「個人関係を重視するメンタリティーは不特定多数を相手にするビジネス、例えば、金融、流通などには合わないのではないか?」との説明はビジネスマンならではの発言だった。もちろん、ロシア社会は変化しており、市場経済で育った若い世代が生まれつつある。それでも、変わらない部分はあるのかもしれない。ロシアは「不可解、謎の国」といわれるが、生身の付き合いから生まれる情報がいかに貴重であるか、つくづくと実感させられた研究会だった。

毎日新聞出身 日本大学総合科学研究科教授 石郷岡 建

「内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞」の食事会

本クラブの内川芳美会員が逝去されてから3年が経つ。内川さんは東大新聞研究所創設以来の所員、所長であり、日本新聞学会(現日本マス・コミュニケーション学会)でも創立以来の会員として会長も務め、日本におけるマス・コミュニケーション研究の発展に大きく貢献された。没後、都子(くにこ)夫人はその遺志を継ぎ、マスコミ研究の発展および若手研究者の育成のために、基金一千万円を学会に寄付された。

そこで学会では「内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞」を

◆会議報告◆

第369回企画委員会(10・2 宴会場) 自民党総裁候補討論会(9・21)について意見交換した後、今後のゲスト候補について協議した。

出席 船橋委員長、宮田(謙)、小此木、山田、中井(良)、橋本、中井(康)、脇、長谷部、矢島、宮田(二)、菅沼、会田、田崎、飯野、川戸、井田、和田、芋原、石郷岡、高橋、長沢、藤井、藤村の各委員

第286回会報委員会

(10・10 シルバールーム) 11月号の編集について協議した後、1月号の「新春随想」を広瀬道貞氏放

設けるとともに、基金の一部を国際交流事業にあてることを決定。「学会賞」の第1回受賞作として藤田真文「ギフト、再配達」テレビ・テクスト分析入門(せりか書房)、福岡良明「反戦のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗」(世界思想社)、水嶺重敏「怪盗ジゴマと活動写真の時代」(新潮社)を決めた。6月、熊本で開かれた本年度総会で表彰されたが、秋季研究会が10月27日東京の日本大学で開かれるのを機に、その前日、クラブ小会議室で、内川夫人と受賞者、学会の基金運営委員を交えて第1回授賞を記念する会が開かれた。

春原昭彦(上智大学名誉教授)

連会長(テレビ朝日)に依頼することを決めた。

出席 住田委員長、池谷、石田、上村、國府、竹居、見市、村澤、渡辺の各委員。第362回会員資格委員会

(10・22 大会議室) 会員入退会を審議し、各都道府県の広報担当や東京事務所長などに特別賛助会員への入会を勧めることを決めた。出席 森、杉山、石川、二藤部、今井、田中、若松、工藤の各委員。

第447回理事会(書面)

クラブ賞規約と内規にもとづき、08年度の日本記者クラブ賞を実施することを決定した。

相撲取材今昔の感

協会も部屋も記者も改革が必要

山崎 正



近頃相撲界がにぎやかだ。

連日テレビ、新聞で取り上げられない日はなく、次から次へと話題に事欠かない。これが土俵の外のことばかりなのが非常に残念だ。

ことの発端は、2007年8月1日、日本相撲協会はこれまでにないほどの厳しい処分を横綱朝青龍に下したことから始まった。

名古屋場所後、肘・腰椎の疲労骨折で治療を要する、という診断書のもとに夏巡業の休場届けを出しながら、親方に無断で帰国し、そこでサッカーをしていたことによる処分だ。

処分内容は、2場所出場停止、11月場所千秋楽までの謹慎、帰国はもちろん、部屋と病院、自宅以外への往來を原則禁止、4カ月の減棒30%というものだった。この処分にだれよりも驚いていたのは朝青龍本人だ

った。一人横綱26場所、通算で21回の優勝、伝統ある国技の相撲を精一杯盛り上げ、責任を果たしてきたのになぜ自分が処分を……。これまでは何の処分もなかったのに……。

これまでとは、2003年名古屋場所、同じモンゴル出身の旭鷲山戦で鬚をつかみ、引き落とし、横綱としては史上初の反則負けとなった。その後も旭鷲山の車のサイドミラーを壊したり、仕度部屋の風呂場で激しく言い争いをしたり、許可なくモンゴルへ帰国したため、先代高砂親方の葬儀に無断欠席、今年3月稀勢の里戦では、倒れた背中を膝で蹴り駄目を押した。また4月には、時津風部屋に出稽古の際、豊ノ島に大技をかけ大怪我を誘い非難を浴びた。

こうしたことを横綱審議委員から

は「横綱としてあるまじき行為」と忠告を受けていた。にもかかわらず協会は師匠高砂親方に本人への指導強化をより一層厳しくと促す程度にすませていた。今回はサッカーをしている様子が報道され国民の非難を浴び、協会としても早急の処分を出さざるをえなかったのだと思う。

■外国人力士は61人

今回の件では「外国人力士」がクローズアップされた。外国人力士が日本の相撲で脚光を浴びたのは、1972年7月優勝の高見山（現東関親方）だ。もちろんそれまでも中国、韓国出身力士も多数いたが、ハワイから一人で来日した高見山が一躍日本相撲界で人気を呼んだのは本人が当時日本人より礼節をわきまえ、

礼に始まり礼に終わる日本の国技である相撲に全身全霊注ぎ込んだ情熱があったからだと思う。初めて外国人が部屋を起こし横綱曙を誕生させた。

その後一時トンガの力士が角界に旋風を巻き起こしたことがあるが、その時期は短かった。そして曙、武蔵丸、小錦のハワイ勢が土俵を席巻。日本の相撲は大きな変化を遂げまさに「黒船到来」の感があった。それから1992年、旭鷲山、旭天鵬が入門してから次々とモンゴル勢が来日し、今や東西の横綱としてトップの座についた。

現在力士数は723人、そのうち外国人力士が61人、さらにそのうちの半数34人がモンゴル人だ。次いで中国、ロシア、ブラジル、グルジア……あまり知られていないところではハンガリーの力士もいる。年々増える外国人力士に、協会は1部屋1人制度を設けた。実に全力士の10分1近くが外国人力士とは驚きだ。

ここまで国際的になってしまったのに、受け入れ体制、教育指導が変わっていないのがいろいろな面で誤解を招いているのではないか。外国人の悩みを聞いたり、わかりやすく教育指導することが必要とされているのではないだろうか。同様に若い



曙にインタビューする筆者

日本人力士の教育や育て方も変えてゆかなければならない時期に来てい
ると思う。良い意味で改革の時を迎
えている。協会も部屋もそして私た
ち記者たちも……。

裏ネタ主義の取材へ

今、スポーツ新聞の読者のニーズ
が変わって来た。より人間的な部分
の話題を要求して、より興味あるこ
とに記事の内容も変わりつつある。
かつては、スポーツとしての相撲故
に、力士への相撲記者の質問、取材
も技術、精神面の質問に終始した。
その内容もかなり鋭く、つつこみ、
記事の内容も深みがあった。しかし
現在はそこまで追及するより、力士
の裏の部分で紙上にぎわせた方が

読者の興味がわく。またテレビも視
聴者がとびつきそうな裏ネタを引き
出そうとしている。相撲を取り終え
仕度部屋に戻り風呂に入り鬘を結い
直す時、記者が質問する。

かつては厳しく今日の取り口や心
境を記者がうまく聞き出していた。
ところが、最近では質問の仕方の方
つつこみも甘く、単的な質問が目立つ。
特に横綱には失礼な、とんちんかん
な質問で相手が答えに窮することも
ある。記者が質問せずに逆に横綱か
ら「何か面白いことない？」と質問
されたりする。かつてはありえな
かったことだ。最近のスポーツ取材を
する若い記者やアナウンサーは幅広
い分野を担当するため、相撲に対す
る知識が薄れているように感じる。
それはしかたないことかもしれない

いが……。「関取はど
れくらい練習をするの
ですか?」「明日の試
合はどのように戦いま
すか?」との質問に力
士たちは苦笑いをして
いた。
相撲では練習は稽
古、試合は取り組みと
独特の用語があり、と
ても奥深いものだ。相
撲の起源をさかのぼる

と、のみのすくねとたいまのけはや
の日本書記に辿りつく。常にそこ
には神がいて、神に祈る神事がとり
行われていた。今でも本場所前日土俵
祭りや神を呼び、千秋楽に神を送る
行事で幕を閉じる。

世界中には数々の格闘技がある。
韓国相撲(シムル)、ロシアのサンボ、
そしてモンゴル相撲等……。しかし
日本の相撲ほど歴史と伝統の上に格
式や礼を重んじていて今日まで盛ん
なスポーツは世界でもめずらしいの
ではないだろうか。取り組みだけで
はなく、東西の力士で独特の節まわ
しで呼び上げる「呼び出し」、勝敗
の軍配をあげる「行司」、そしてあ
の鬘を結う「床山」とひとつの取り
組みにもいろんな人が関わり、ドラ
マを作る。

これからの相撲に携わる若い人た
ちには、よく学んでいただき、好き
になつてほしい。厳しい質問に力士
たちは「よく調べているなあ」と
逆に心許し、良い取材ができるであ
ろう。

マスコミに口閉ざす横綱

今から4年前、朝青龍が横綱に推
挙される前日、私はニュースの番組
で部屋近くの彼がよく行く焼き肉屋

から中継でインタビューをした。
忙しいなか駆けつけて彼は開口一
番「こんな事なら横綱になんかなら
なければよかった」と冗談まじりに
話した。しかし無事インタビューも
終わり、次に綱打ちをした時、取材
に行くと「この間はありがとうござ
いまして」と礼儀正しかった。

今回の件では、マスコミにも口も
閉ざし、いったい何がそうさせたの
かは、誰もわからない。横綱といっ
てもまだ27歳の青年、人生の道に迷
っているのではないだろうか。ここ
は協会側が正面向いて話し、わかち
合い、彼が初心に戻る気持ちで謙虚
な姿勢で取り組んで、再び土俵で活
躍し、新聞の一面を見事な相撲つづ
りで飾ってもらいたい。

歴史と伝統を重んじながらも時代
の流れにより変わってゆくであろ
う。この業界の行く末を後輩記者ら
と伝えてゆきたい。

やまざき・ただし会員 1944年
生まれ 73年テレビ朝日(当時日本教
育テレビ)入社 アナウンサーとして
ニュース スポーツ担当 73年から2
003年まで「大相撲ダイジェスト」を
30年間担当 アナウンス部長 専任
局次長 2004年退社

異色閣僚 舛添厚労相

早朝から密着、仕事量は増大

▼牧嶋 博子
(東京放送)

燃えるゴミの日は火曜日と金曜日。燃えないゴミの日は木曜日。そして土曜日は資源ゴミの日。

これは舛添厚生労働相の自宅周辺のゴミ収集日だ。担当の若い記者はこのゴミの日を覚えた。自分の家のゴミは、あまりの忙しさで出しそびれているというのに。

■ゴミ出し大臣

8月27日に発足した安倍改造内閣の目玉は、安倍政権の批判を続けていた舛添参院議員を厚生労働相に抜擢したことだ。舛添大臣は就任の翌朝、これまで通りサンダル履きで、ゴミ集積所に現れた。「これはうちでは僕の仕事」。

「家事をする大臣」の姿は全局で放送され、好感を持って迎えられた。大臣の発言は真実だ。このゴミ出しはパフォーマンスではない。文字通り日課。そして、朝6時45分の「ゴミ出し」や「新聞取り」に担当記者

は毎朝付き合うことになった。

舛添大臣誕生後、わたしたちの仕事量は飛躍的に増えた。この異色の大臣の動静に密着する必要が出てきたからだ。

■テレビの申し子

舛添大臣は、学者だった頃、テレビの討論番組で頭角を現した。そして、トップ当選で参院議員になった後も、ワイドショーなどの情報番組の常連としてテレビ出演をこなしてきた。派閥に属さず、官僚出身でもない政治家が、頼りにするのは「大



労働基準監督署を視察後の発言を拾う(9.5渋谷) =時事通信社提供

衆的人気」だ。テレビ出演で視聴者を引きつける発言ができれば、知名度は上がり、人気を得られる。

舛添大臣の発言は今のところ国民の立場に立っている。分かりやすく、端的だ。大方針を包み隠さず話す。カメラを向ければテレビ向きの気の利いた発言をする。発言を撮りそこねるのは痛い。だからテレビ記者は自らデジタルカメラを持って、彼を追う。浮塵子(うんか)のごとく、ストーカーのごとくだ。

■痛快さと危うさ

9月に社会保険庁、市町村職員の年金保険料着服案が公表された。着服件数は市町村職員のほうが多く、さらに刑事告発されていない事案もあることが、舛添大臣の怒りに火をつけた。刑事処分を受けていない自治体職員について「泥棒は草の根を分けても探し出し、牢屋に入ってもらおう」と発言。しかしこの発言に市町村長の一部が抗議の文書を送付。この抗議について今度は「小人の戯れ言」と発言。

年金問題に端を発してはいるが、本質的な問題ではない。まさに「場外

乱闘」だ。

さらにこの発言の真意を問われ大臣は、「あほ市長、バカ市長と言えば良かったんですか」と発言をエスカレートさせた。

結局この場外乱闘は、舛添大臣が予算委員会という公式の場で発言を撤回したことで終息した。

痛快さと危うさ。発言は賛否両論を巻き起こしている。国民の支持はまだ離れていないが、これから先はどうなるのだろうか。

C型肝炎問題の対応で、大臣は、これまでの厚生労働省の対応や官僚を盛んに批判している。官僚機構の批判で世論の支持は得られるだろう。しかし、これは両刃の剣だ。

年金問題、C型肝炎問題。懸案が山積する厚労大臣がこの難局を乗り切るには「いかに官僚機構を味方につけ、思い通りに動かすことができるか」の一点にかかっている。これに失敗すると、政策は行き詰まる。世論の支持は離れ、裸の王様になるだろう。

潮目が変わる時が来る。その瞬間を逃さないためにも私たちは今日も舛添大臣を追っかける。

まきしま・ひろこ 1983年入社 現在
社会部スペシャリスト部長 2001年から
厚労省担当

ミャンマー軍事政権

隣国で内実を見極める「目」

▼藤田 悟
(毎日新聞社)

ミャンマー取材は難しい。軍事政権は外国人記者にめったにビザを発給せず、現場に行くことが極めて困難だからだ。9月下旬、僧侶が主導した反軍政デモに対する武力弾圧で多数の死傷者が出た際も、ビザを取ることができなかった。隣国からカバーせざるを得なかった。

バンコク駐在の共同と東京(中目)の記者は、たまたま離任あいさつ名目でビザを取っていたのでヤンゴン入りしたが、3日目に治安当局に見つかって強制退去となった。

■9年ぶりに毎日に入国ビザ

軍事政権が外国メディアを敬遠するのはもちろん、自分たちに都合の悪いことを取材され、書かれるのがいやだからだ。それでも年に数回、バンコクに駐在する外国人記者をまとめて招くことがある。ただし、国軍パレードや摘発麻薬の焼却式など、自分たちが宣伝したい行事があ

るときだけである。

毎日新聞は10年前、民主化運動指導者であるアウンサンスーチーさんのエッセー「ビルマからの手紙」を掲載していたため、長年にわたって「ブラックリスト」扱いを受けてきた。国内外に大きな影響力を持つスーチーさんは、軍事政権にとって最大の政敵であり、彼女の言い分を連載する新聞など「反政府的」そのものだからだ。

在ヤンゴンの知人を通じた交渉が実り、私は昨年10月、約9年ぶりにビザが許可され、他の外国人記者とともに入国することができた。新憲法の原則を審議する国民会議の再開の取材という名目だった。これ自体はお決まりの公式行事でさほどおもしろいものではないが、入国の機会を利用して街を歩き、ミャンマー人の知人と情勢について語るには非常に貴重な機会だった。

招かれた外国人記者が、窓口であ

るチョーサン情報相に「新首都を訪問したい」と一斉に要望した。それが実り、今年3月には、新首都で行われる国軍創設記念日のパレードを取材する名目で外国人記者が招かれた。

軍事政権は結構、外国メディアの動向を気にかけているし、メンツを重んじる幹部たちには律義な面もある。情報省の担当者にはこやかに笑顔で我々を迎えてくれるし、質問には軍事政権の論理なりにいちいち答えてくれる。招待者をもてなすべはそれなりに心得ている。

しかし、都合の悪い場面は外国人記者には絶対に見せたがらない。デモの武力弾圧はその究極のケースだ



今年3月、旧首都ヤンゴンから新首都ネピドーへ向かう道中で出会った子どもたち=筆者撮影

った。取材ビザはもちろん、観光ビザの発給も厳しく制限し、外国メディアを徹底的に排除している。

■取材源と人脈培う努力

そんな事情から、ミャンマーに関する報道は今のところ、隣国タイを拠点に行わざるを得ない。それでも、民主化グループやひそかな取材協力者などを通じて情報は流れてくる。

デモ弾圧に関しても、さまざまな情報や映像が国外に届いた。軍事政権がいかに外国人記者を閉め出したところで、完全に情報を遮断することなどできない時代に入っていることは明白だ。

バンコク駐在のミャンマー・ウォッチの仕事は、軍事政権側と民主化勢力側、さらに国際社会の動きに関する膨大な情報を見極め、取捨選択することが重要となる。そのためは、日ごろから幅広い取材源と人脈を培っておくことが必要だ。ただ、記事を書くときにいつも頭の中に浮かぶのは、たまにしか訪問できないミャンマーで出会ったいろんな人たちの表情や生き様である。

ふじた・さとる 1983年入社 大阪社会部 マニラ支局長 外信部副部長などを
経て 04年4月からアジア総局長(バンコク)

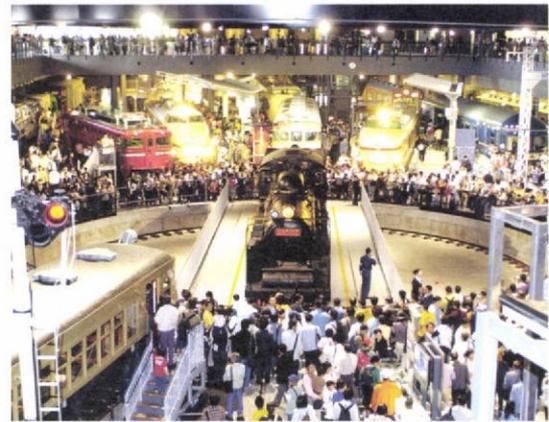
鉄道博物館オープン

大宮市時代からの夢
イメージアップの起爆剤に

▶高橋 功
(埼玉新聞社)

「鉄道の日」の10月14日、さいたま市大宮区に鉄道博物館がオープンした。2006年5月に閉館した東京都・神田の交通博物館からパトントンタッチした「鉄道の聖地」は、延べ床面積が4倍、展示スペースも2倍になるなど、内容もスケールも格段に大きくなって生まれ変わった。鉄道関係資料の総収蔵品数は約58万点。日本最大級の博物館だ。

館内には、1871年に英国から輸入された日本初の蒸気機関車「1号機関車」など交通博物館に展示されていた車両に加え、天皇陛下専用御料車、東北・上越新幹線の初代



「貴婦人」の愛称で親しまれたC57など36両の車両が展示されている

車両など、計36両を展示。鉄道ファンでなくても引き込まれるような迫力だ。オープン当日には、前日からの泊まり組みも含め9400人が来場。開場直後から中高生のグループや家族連れらであふれ、昼前から入場制限されるほどの盛況ぶりだった。開館直後の1週間の入場者数は計約5万人。同博物館は今年度60万人、年間100万人を見込んでいる。

「埼玉といえば○○」といった特色がなかった埼玉県やさいたま市にとっても、鉄道博物館はイメージアップのための起爆剤だ。同市は氷川神社、盆栽村、サッカーJリーグ大宮アルディージャのホームグラウンド

「NACK5(ナックファイブ)スタジアム大宮」とともに、大宮駅周辺観光地の一つとしてアピールに力を入れる。市民の間には、かつての「鉄道のまち・大宮」復活のムードが広がっている。

最寄りの埼玉新都市交通「鉄道博物館(大成)駅」では、オープン初日の乗降者数が平時の日曜日の7倍に当たる約2万人を記録。その後の平日も博物館オープン前より1日5000人前後増えている。1983年の開業以来、伸び悩んでいた沿線の開発にもビジネスチャンスが広がった。JR関東会社が運営する宿泊施設も順調な滑り出し。地元の商工会議所は鉄道にちなんだオリジナルの菓子や弁当をつくり、駅構内で販売。当地のお土産品として予想以上の売れ行きだ。

旧大宮市時代からの熱心な誘致運動が実った地元には、鉄道に対する特別な思いがある。現在のさいたま新都心広がる場所は、1984年まで大宮操車場があった。戦後、全国5大操車場の一つとして関東以北の貨車整理作業を24時間体制で行い、ピーク時には1日7000両の車両が操車されたという。戦前戦後の日本の動脈を支えた操車場を、当

一口メモ 鉄道博物館

敷地面積は約4万1600平方メートル、延べ床面積約2万8200平方メートル、展示スペース約9600平方メートル。総工費124億円(うち25億円はさいたま市負担)。館内は5つのゾーンに分かれており、メインは145メートル×45メートルのスペースに歴代車両35両を展示したヒストリーゾーン。ラーニングゾーンでは、子どもたちが鉄道の原理・仕組みや技術、安全・安定輸送のシステムを体験しながら学べる。このほか、日本最大のH0ゲージ模型鉄道ジオラマ、日本初のSLシュミレーター、ミニ運転列車が人気だ。

時の国鉄鉄道員たちは「ヤード」という愛称で親しんだ。

鉄道博物館のメインエントランスを入ると、高さ4メートルの茶色の大きな彫刻が目に入る。「ぼっぼや」と名付けられた作品は、雨の日も雪の日もホームに立つ鉄道員(ぼっぼや)をイメージ。作者の流政之さんは「これまで鉄道そのものをテーマにした展示物ばかりで、鉄道員に焦点を当てたものはなかった」と語る。「出発進行」といわんばかりの姿は、にぎやかに沸く鉄道博物館のフロアに、日本の鉄道を支えてきた鉄道員たちの魂をも吹き込んでいる。

たかはし・いさお 1989年入社 旧大宮市 春日部市担当 整理部などを経て 2007年8月からさいたま市担当

リレー エッセー

佐藤番③



「首班に佐藤栄作君を推薦する」
池田内閣から禅譲の佐藤政
権は1964年11月に誕生した。
池田路線踏襲の約束通り、官房長
官の鈴木善幸氏を橋本登美三郎氏
に代えただけ。全閣僚「居抜き」
で発足した。

65年6月の内閣改造で田中角栄
蔵相を幹事長に、後継蔵相は池田
内閣で干されていた福田赳夫氏を
抜擢、角福が佐藤政権の両輪とな
った。大野伴睦、河野一郎両氏も
池田氏死去の直前に他界。「三角
大福中」時代に入る。「寛容と忍耐」
「所得倍増」の二枚看板で進めた
池田の高度成長路線は、繁栄を象
徴する東京五輪の宴を最後に終
焉。山一証券が経営危機に見舞わ
れ「65年不況」は深刻。佐藤内閣
の支持率は低空飛行だった。
「私も栄ちゃんと呼ばれたい」
とほやく首相を懸命に支えたのが
「アバウト長官」の登美さん。あり

もしない「首相指示」を会見で乱発
して、よく首相に叱られていた。首相
と登美さんに可愛がられた竹下登官
房副長官は首相公邸住まい。夜討ち
朝駆けの番記者にフルサービイスした。
「講和の条約吉田で暮れて、日ソ
協定鳩山さんで、今じゃ佐藤で沖
縄返還、10年経ったら竹下さん」の
ズンドコ節を何回も聴かされた。
番仲間ですら早大空手部の猛者、内藤
武宣毎日記者は非番時に竹下夫人の
麻雀相手を務めたのが縁で、次女の
まる子さんと結ばれた。NHKの番

栄ちゃんと呼ばれたい

▼小和口 亮

長だった海老沢勝二前会長は当時独
身で、寛子夫人から見合いを奨めら
れたり、登美さんの後継者と目され
るなど、エピソードは豊富。岩見隆
夫毎日客員、堀川吉則読売元副社長、
清原武彦産経会長、広瀬道貞テレ朝
会長ら初期の佐藤番は多士済々。地
方民放の会長は今も二人が健在だ。
「火事は最初の5分、選挙は最後
の5分が勝負」――首相の選挙応援
の冒頭セリフはこれ。小淵恵三氏が
2回目出馬の時は中之条から帰るへ

りが首相日程に間に合わず、高崎
を離れる首相に、彼は空から必死
に「頑張ります」と絶叫した。
伴睦翁は戦前の院外団出身だが、
総裁遊説ではまだ顔に傷跡が残る
壮士風の院外団の残党が3人ばか
りいて、護衛と称し絶えず総裁車
と番車の列に割り込もうとした。
SPキャップの鎌田警部が排除し
たが、院外団は「退職金」をもらっ
て姿を消した。
佐藤番は約2年務めたが、某日、
佐藤邸を訪れたリーゼント姿の橋
本龍太郎氏は「総

理は仲人をしない
が、私の媒酌には
応じてくれた。ニ
ユースだろう」と
得意げ。ホテルオークラの床屋に
首相が現れる時を探り、隣席で話
しかけるチャッカリ屋だった。
首相は赤坂の料亭街はもとより、
築地の新喜楽、柳橋の柳光亭など
を財界人との会合に愛用。その婦
途度々、ひそかに「隠れ家」の玉
林荘に立ち寄っていた。これは公
然の秘密。
（こわぐち・まこと 元共同通信政
治部次長）
このシリーズは「総理番・佐藤首相」
をキーワードにバトンをつなぎます。

■東京勤務は初めてです
ジル・カンピオンAFP支局長



9月末に
来日。北京
とハノイに
通算10年駐
在したアジ
ア通。特派
員になるの
が夢で、パリの国立東洋言語文化学
院で中国語を学んだ。入社3年目に
それが実現し、81年北京支局に。「み
んなが同じ服を着て、同じモノを食
べていた時代だった」▼10年後の93
年、支局長として再び北京に赴任し
た。「様変わりしていた。経済ニュ
ース対応のため95年には上海支局開
局の仕事にも関わった」▼東京支局
のスタッフは総勢20人ほどで北京と
同じ。ニュースの3分の2は英語で
アジアの提携先へ、残りは当然仏語
で本社へ出稿される。日本語での配
信はない▼サルコジ大統領は弁護士
だったため、話が的確でわかりやす
いことも人気の要因だという。私生
活と政治家としての能力は、フラン
スでは伝統的に分けて考えるので、
離婚も問題になることはないだろう、
と。最近日本では消息を聞かないシ
ラク前大統領については「いまも国
民に好かれている。マダムシラクは
もっと好かれている」。(石川)

キングダム 一見えざる敵



区が、自爆テロに急襲されるところから始まる。嚴重に警戒されているはずのゲートが、いとも簡単に破られ、アメリカ人家族ら死傷者は300人。FBI捜査官も含まれていた。どうやら首謀者はアルカイダの一味らしい。ワシントンから急ぎ編成された男3人、女1人のFBI特捜隊が現地入りする。だが、70年にも

30年ほど前、アラブの産油地帯で活躍する日本企業を取材した。寝所と食堂に簡易カラオケ、マージャンの娯楽設備。男だけの世界だった。アメリカの企業が住宅地を構える地域もあった。プールやゴルフ場を整え、当然の様に家族を伴っていた。映画はサウジアラビアの首都リヤドに設けられた、同工の外国人居住

米軍爆破テロを素材に

1996年、サウジで起こった米軍施設爆破テロを素材に、綿密な取材を重ね合わせたという1時間50分のストーリーは、迫真に満ちている。とりわけ、4人がテロ犯を追い詰めて行くくだりは、FBIの捜査方式を目の当たりにする様で、興味をそそられる。

撮影の中心は、米フェニックスに組まれたサウジのセックトで行われたそうだが、アブダビでのロケを効果的に絡めて臨場感十分。クライマックスでの戦闘シーンは、手持ちカメラを縦横に駆使して、ド

及ぶサウジアラビアとアメリカの関係から、ことを穏便に進めたいと思惑が本国の上層部にあり、5日間と限られた時間、それも行動はサウジ側の監視付きというなかでの捜査が始まる。

だ。キュメンタリーを見る様な凄まじさ。「Ray/レイ」で盲目の歌手レイ・チャールズを演じてアカデミー主演男優賞のジェイミー・フォックスが、本作でも好演している。ピーター・バーク監督。

読売新聞出身 西島 雄造
http://www.kingdom-movie.jp/

呉清源 一極みの棋譜



それは、あの本だったはずだ。しかし、映画では新布石の話はさりげなく触れられているだけだ。

そればかりでない。本因坊秀哉名人との対局で打たれ世間を驚かせた「三三、星、天元」という打ち方はしっかりと描写されているが、それがどんな意味を持ったかは語られていない。呉清源の名を不朽のもの

子どものころ、家に1冊の碁の本があった。若き日の木谷実と呉清源が構想し、囲碁界に革命をもたらした「新布石」の本である。今あれば、それは奇書と言っていだろう。

映画の中では、青年・呉清源が後の夫人との最初の出会いのとき、「これは木谷さんと私が書いたものです」と本を手渡すシーンがある。

棋士としてより人間に焦点

監督と主役は中国人だが、大部分の出演者は日本人で、撮影もほとんど日本で行われたという。戦前と戦後間もないころの貧しかった日本の情景と風俗が、懐かしく美しく再現されている。

毎日新聞出身 荒井 忠男
©2006 Century Hero, Yeoman Bulky
Co http://www.go-movie.jp/

とした不敗の「十番碁」についても、断片的なシーンはあるが、やはり立ち入った説明はない。

この映画は、昭和の囲碁界にそびえ立つ棋士・呉清源の生涯を描いたものである。その描き方は、どちらかといえば棋士としてよりも人間としての呉清源に焦点を当てたスタイルになっている。囲碁の世界の出来事は映像にはなりにくいし、まして碁を知らない人に分かってもらえないようにするのは大変だ。囲碁ファンとしては碁に即した呉清源の偉大な足跡が十分に語られているとはいえない恨みは残るが、それも仕方のないことだろう。日中間の戦争の狭間で悩み、一時碁を捨てて新興宗教に身を投じ、やがてそこから抜け出して囲碁界に復帰するというあたりが映画の山場となっている。

■私の後藤田正晴―57人の証言

栗原 猛 (共同通信出身)
「ちょっと待てよ」が大事だ。後藤田正晴元副総理といえは、「護憲と平和」「権力の自制」などを説いたことで知られるが、晩年はよく「日本人は付和雷同しやすいところがあるから、『ちょっと待てよ』という勇気が大事だ」と言っていた。政治家や財界人が若手将校や右翼の活動家に次々に暗殺され、軍国主義に流れていく時代に中学、高校時代を送ったことがバックボーンになっている。

中曽根康弘、村山富市、佐々淳行、加藤紘一、ジェラルド・カーティス氏ら57人が後藤田論を寄せており、現代史の生きた資料でもある。
編纂委員は北原健児、瀬下英雄、福家康宣の各氏と私。

(講談社 1890円)

■メディア・イノベーションの衝撃―爆発するパーソナル・コンテンツと溶解する新聞型ビジネス

橋場 義之 (毎日新聞出身)
近未来のジャーナリズムのヒント
ブログ、掲示板、SNS、WEB 2.0
：技術もシステムも実態も分からないことが多すぎるネットの世界。し

かし、そこで情報を発信し、仕事をし、楽しんでる人たちは、われら旧マス・メディアを「マスゴミ」とあざけり、不信感を露骨に表す。「敵(?)を知り、己を知れば:」。そんな気持ちから、彼らに参加してもらって始めた約1年の連続討論会の記録をまとめました。すぐここに来ている近未来のジャーナリズムを考えるヒントがみつかるはずですよ。

(日本評論社 2835円)

■晩年長寿の達人たち―生涯現役の秘訣

前坂 俊之 (毎日新聞出身)
歴史的な偉人、達人の知恵。日本は世界一の「超高齢社会」で、いまや誰もが人生80年以上を謳歌する時代。明治以来、90、100歳以上の健康長寿を保ち、生涯現役で最後まで活躍した歴史的な偉人、達人80人をリストアップし、その精神力、創造力、健康法、食生活などに迫ったものです。佐藤一斎の「言志晩録」に「仕にして学べば、則ち老ゆとも衰へず。老いて学べば、則ち死すとも朽ちず」とある。日本人の遺産とも言ふべきこうした達人・超人の知恵、教えから大いに学び、目指せ!

元氣な「セントナリアン」(百寿者)です。

(別冊歴史読本 1680円)

■英国王室の女性学

渡辺みどり (日本テレビ出身)
男性にこそ一読を。史上初、チャールズ皇太子の後妻に納まったカミラ夫人。特技は皇太子が一目惚れしたという「馬あしらい」。世論の逆風を受けながら30年に渡る不倫を続け、次期国王の妻の座を射止めた。この不倫関係に悩み苦しみ続けたダイアナ妃。彼女は王室と国民に2人の後継者を与えた。ダイアナ妃の悲劇は本気で夫である皇太子を愛して

しまったことから始まる。見て見ないふりができず、カミラ夫人に敗れたダイアナ妃。

一方、初恋を貫き今秋ダイヤモンド婚を迎える、現エリザベス二世女王王陛下。産業革命の時代に麻酔で出産、9児の母として育児室を持ったヴィクトリア女王。古くは「女王の時代は栄える」を体現したエリザベス一世。妃たちは500余年の英国王室を血のリレーで継承してきた。血統を守る義務とプレッシャー、夫の不倫を見て見ぬふりする度量、死と隣り合わせの出産。男性にこそ一読をお薦めしたい。

(朝日新書 756円)

「クラブ賞」候補者の推薦を

締切は明年1月31日です

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を「日本記者クラブ賞」候補としてご推薦ください。締め切りは1月31日(木)です。
「選考基準」は下記の通りです。
①現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である(現役という意味は現に活動しているという意味で故人は対象としない) ②スクープ賞ではない

く、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。③その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

会員および会員社に属する方々が候補有資格者です。推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由(2000字以内)に参考資料を添えて提出願います。推薦委員会、選考委員会で添付された資料をもとに審査します。詳細は事務局へお問い合わせください。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■テレビ東京・横徳子さん送別会

「クロージング・ベル」など経済ニュース番組のメインキャスターを務めてきた、横徳子さんの送別会が開かれた。同社から藤延直道常務をはじめスタッフや関係者など約60人が出席して“卒業”を祝った。(10.5 宴会場)

■シンポジウム「呉清源 囲碁と日中友好」



戦前から戦後にかけて活躍した「昭和最強の棋士」呉清源さんの足跡をたどるシンポジウム。呉夫妻も出席し、映画「呉清源」に出演した松坂慶子さんから花束が贈られた(写真=読売新聞社) パネルディスカッション

では大竹英雄九段・日本棋院副理事長、華以剛・中国棋院院長、三好徹の3氏が呉さんと囲碁を通じた日中友好について語った。日中国交正常化35周年を記念して読売新聞社と日本中国文化交流協会が主催した。(10.12 10階ホール)

■新聞配達に関するはがきエッセーコンテスト表彰式

新聞配達にまつわるエッセーコンテストの最優秀賞受賞者、審査員特別受賞者が表彰された。14回目の今年は、新聞配達員との交流など心温まるエピソードを描いた4922編の応募があった。その中から、オートバイのエンジンを止めて坂を上る新聞配達員の心遣いへの感動、新聞配達をする母親を手伝った様子、雨の日にビニールに入った新聞を楽しみにしている小学生の話、の3編が最優秀賞に選ばれた。(10.13 宴会場)

照会先：日本新聞協会経營業務部 Tel：03-3591-4405

■「パワーゴルフで優勝杯を手に」 ゴルフの会



第89回日本記者クラブゴルフ会は昨年荒天のために中止になったリベンジとして、10月31日藤ヶ谷カントリークラブで開かれました。成績は、シングルハンディを目指して日々ダンベルや縄跳び

でトレーニングに励んでいる阿部和義会員(写真左 ネット77)が、見事なパワーゴルフで優勝カップを手にされました。以下、二位・長谷川創一会員(同78)、三位・塚越喜昭会員(同78)でした。次回は第90回の記念大会になります。多数の参加をお願いします。 幹事 柿原 健(日本プレスセンター)

新しいOB会員

■長井さん殺害に抗議する会記者会見



映像ジャーナリスト・長井健司さんがミャンマーで取材中に治安

部隊に殺害されたことに抗議する会が会見した。ジャーナリストが中心となっている呼びかけ人の中から、鳥越俊太郎、田丸美寿々、徳光和夫の3氏が出席し、長井さんとの思い出を語り、事件の真相解明とビデオカメラ・ビデオテープなど遺品の返却を求める署名活動を行っていることを発表した。(10.16 10階ホール)

照会先：ミャンマー軍による長井さん殺害に抗議する会 Tel：03-3746-0065

公式ブログ <http://blog.goo.ne.jp/nagaikenji20070927/>

■第60回新聞週間「記念の集い」

新聞週間恒例の記念の集い(主催：日本新聞協会)が、読者を中心とした約250人が参加して開かれた。講師は脳科学者の茂木健一郎さんと環境ジャーナリストの枝広淳子さんで、日頃から新聞について思っていることや、新聞に対する期待などを語った。(10.19 10階ホール)

■田久保忠衛氏の出版を祝う会

田久保忠衛会員(時事OB)の著書『激流世界を生きわが師 わが友 わが後輩』(並木書房)の出版を祝う会が開かれた。報道界や政界、論壇など関係者280人が出席、石破防衛相、発起人の櫻井よしこ氏、渡部昇一氏らがお祝いの言葉を述べた。(10.22 10階ホール)

■中日・田中哲男さんの特別功労賞受賞を祝う会

田中哲男・中日新聞東京本社編集委員が、社の特別功労賞を受賞したお祝いの会が開かれた。田中さんは連載写真企画「富士異彩」で新聞協会賞を受賞したほか「海回廊に行く」「荒川新発見」「富士山に祈る」などの長期連載を執筆、「専門記者魂を發揮し、読者に深い感銘を与えた」として9月1日の創立記念日に表彰された。現在も「東京慕情」を連載中。当日は社内の仲間が集まり、宇治敏彦相談役から“クラブ・タイ”が贈られた。(10.29 宴会場)

■在京島根県ジャーナリストクラブ

講師に女性自衛官の小松里美さん(松江出身)を招いた。同氏は2004年のイラク人道復興支援軍に参加しており、サマワに滞在した経験談などを紹介した。このクラブは2002年に発足、現在80人が会員となっており、年2回会合を開いている。(10.29 10階ホール)

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



11月のカクテル 今月のハーフサイズ・カクテルは、コペンハーゲンとスイート・メモリーズです。どちらもやや甘口で、女性にもおすすめです。常設のマティーニとマンハッタンもどうぞ。(420円)



きりたんぼ鍋 (11月19日～30日)
今年も秋田の割烹「山蔭」から「きりたんぼ鍋」を取り寄せます。1年間のご利用に感謝して期間限定サービスです。特価(1人前2,000円)でのご提供ですので、必ず事前予約をお願いします。

霜月懷石 (11月30日まで)

松茸の土瓶蒸しをはじめ、深まる秋の味をお楽しみください。(板長 薬科浩)
前八寸、土瓶蒸し、萩すだれ盛り(刺身)、甘鯛深山焼き、蕪釜盛り、鰯帆立包み揚げ、焼きおにぎり茶漬、水菓子(5250円)



蟹コース (11月12日～12月27日)
3種類の蟹を使ったちょっと贅沢なコースです。タラバガニのあぶり焼き、ズワイガニの唐揚げ、タラバガニとほうれん草のコンソメスープ仕立て、ワタリガニのクリームグラタン 蟹ピラフ添え、アラスカ風クレープ。4200円。(シェフ：黒須修一)

忘年会・新年会プラン (11月26日～08年2月2日)

年末年始向けに「忘年会・新年会」用のパーティープランをご用意しました。社内の集まりや、プライベートなお仲間との会合にご利用ください。8種類の洋食に和食(寿司、そば)をセットにしておひとり3,300円です。1,200円での飲み放題も可能です。10人からお申し込みください。なお、部屋代は別ですが、飲物の持ち込みは自由です。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 808人
個人会員 1650人 法人・個人賛助会員 71社 178人
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 9人
計 217社 2,720人

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン(9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン(10階)	経理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=池谷 忍 石田昭彦 上村幸治 國府一郎
竹居照芳 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

ラウンジ利用の仕方をお願い

第174回施設運営委員会(9月28日)で、ラウンジの使用の仕方での1会員からの申し出を協議し、会員の皆さまに次のようなお願いをすることになりました。

- ① 原則として、利用者はラウンジのテーブルやイスの配置を変更しない。必要な場合は係りの者にご相談ください。
- ② 常時、ラウンジの奥に7～9人用で使えるテーブルがありますので、少人数の集まりに使うときは事前にクラブ受付(3503-2721)へ電話して、この席をご予約ください。
- ③ 小集団の利用をする場合は、当日、空いている部屋があれば無料で提供も可能で、レストランへ席をお作りすることもできますので、スタッフにご相談ください。

限られたテーブルとイスを①小集団の利用と②1人ないし2人での利用の両タイプに対応するための措置です。これによって、ぶらりと1人で見えた会員が落ち着いてくつろげるような環境も担保していくことにしました。皆様のご協力をお願いします。

ムーディーズ・ジャパンが入会

法人賛助会員としてムーディーズ・ジャパンが入会しました。1900年設立の米債券格付け機関で、日本法人は1985年の設立です。

<訃報>

有馬純達会員(朝日新聞出身 79歳)が10月12日肺がんのため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」：10月の新規掲載

- 「法の日」記者会見 島田最高裁長官、大谷最高裁事務総長、平山日弁連会長、但木検事総長(2007.10.1)
- 自民党総裁候補討論会(2007.9.21)
- 江田五月参院議長(2007.8.30)
- 唐澤洋人日医会長「国民医療を守るために」(2007.8.24)

今後の行事予定 (11/2現在)

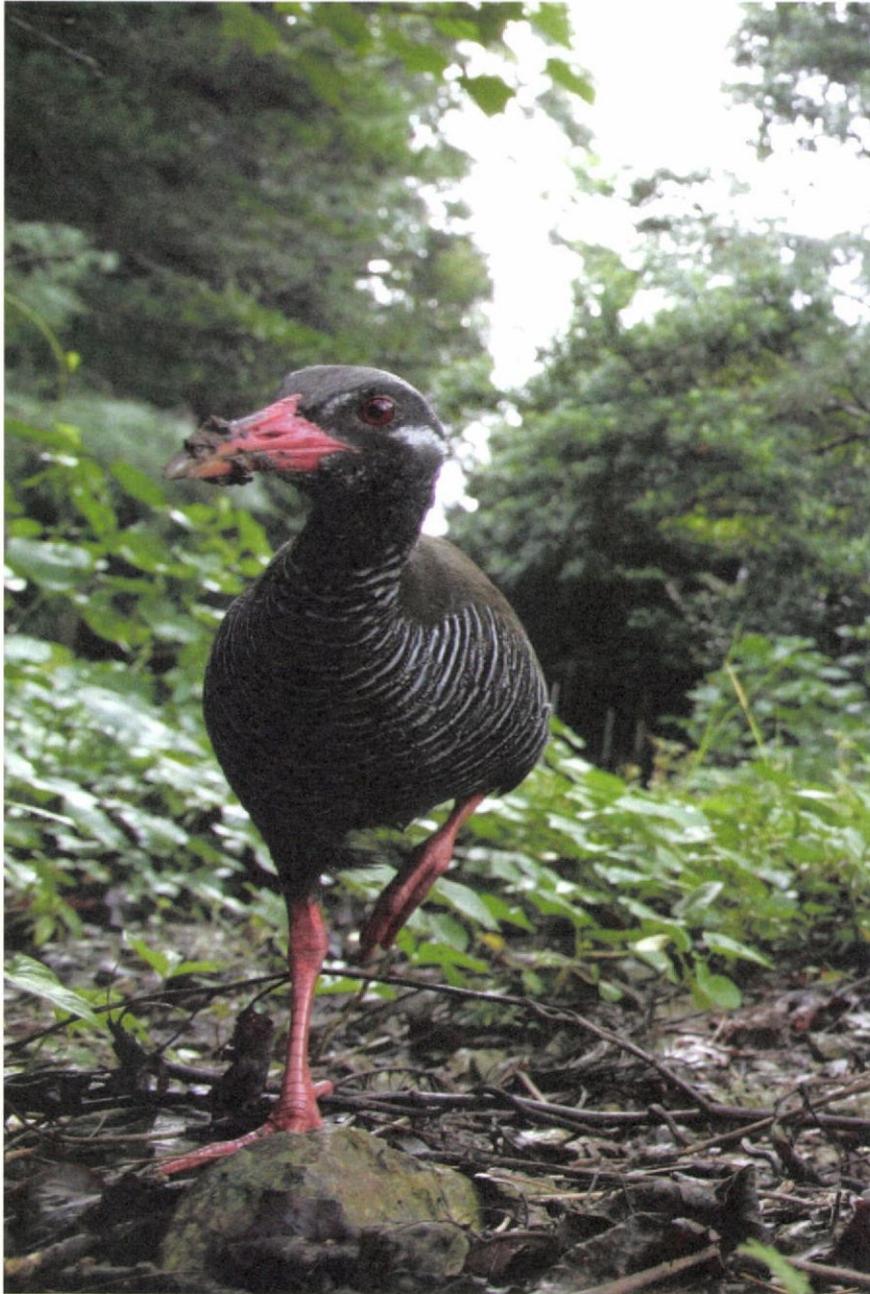
- 11.16(金) 12:00～14:00 (10階ホール)
齊藤惇東証社長 昼食会
15:00～16:30 (10階ホール)
上野俊彦上智大学教授 ロシア⑦
- 11.19(月) 12:00～14:00 (10階ホール)
鳩山由紀夫民主党幹事長 昼食会
- 11.30(金) 12:00～13:30 (10階ホール)
吉村博人警察庁長官 昼食会
- 12.10(月) 15:00～16:30 (10階ホール)
袴田茂樹青山学院大学教授 ロシア⑧

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影 尾崎 孝 (読売新聞 東京本社写真部)



獣道に設置したカメラを数十メートルの距離から遠隔操作して至近距離で撮影 沖縄本島「やんばるの森」2007年9月

加害者は誰か

国の天然記念物ヤンバルクイナが車にひかれる事故が増えている。県道や林道を利用して、人間がクイナの生息地の奥深くまで侵入して来るのだ。侵入者は人間だけではない。

マングースは沖縄本島南部から北上を続けて北部の生息地に侵入、ヤンバルクイナの最大の脅威となっている。捨てられたネコも野生化して侵入してくる。マングースやネコを大々的に捕獲してもクイナの減少に歯止めがかからない。ヤンバルクイナはごく近い将来に、絶滅する危険性が極めて高いと見られている。環境省はこのままでは絶滅を避けられないと人工繁殖に乗り出している。

ところでマングースはネズミやハブの天敵にしようと明治時代に外国から持ち込まれた。マングースは食べ物が豊富だったから、ハブを襲うという危険を冒さなかった。いまやヤンバルクイナの最大の加害者となってしまう。取り返しのつかない失敗だった。生き物ではないが、教育バウチャー制度などと聞きなれないカタカナ言葉を耳にするようになった。安易に外国から制度や仕組みを入れて、将来マングースのようにもてあますことがないようお願いしたいものだ。

(中島 勝)